

枯色の丘 岩見沢 佐藤 玉治

多からぬ櫻に賑ひし公園に人影見えず鳥も来  
鳴かず  
この池のいづべに冬を越しにけむ日向浅みに  
鯉の子群れぬ  
老二人の交す言葉はその朝の体調悪しきが少  
なくやさし  
枯色の丘のなだりに点々と街灯の如辛夷咲き  
出づ  
芽吹かざる梅の梢に鳴きつづく雀が 一羽風に  
揺れつつ

北海道医報歌人会詠草

関ぐ 札幌 山口 康徳

党内に波風立たすトラブルは  
兄弟牆に鬨ぐシグナル  
業界の興亡はげし持株をすつる者あり  
そを拾ふあり  
世の濁染まぬお顔の愛子さま会ふ国民を  
ほのかに笑ます  
ハイテクとコインの桶も倒すなり  
姿見えぬにつよきハリケン  
放送のはじまりしより八十年  
海ゆ顔出す浦島障若

老眼鏡 札幌 古屋 統

幾度か遺失重ねて老眼鏡バーゲンショップに  
漁る知恵付く  
度の適う眼鏡探せし日は遠し今や我が眼に合  
うは少なき  
最強度の4チオプトリーを買いたれば「お元  
気ですね」の世辞が付き来る  
眼鏡よりケース遺失が悔やまる、「のんき  
亭」なる昼めしの店  
生来の忘れっぽさに積む加齢めがね予備持て  
旅の鞆に

震度六 札幌 小国 孝徳

震度六の地震に何事もなかりしかカーテン開  
けて見下ろす大学界隈  
寝呆けまなこ擦りつつ入りし吾が書齋啞然た  
り書籍の斬る散乱  
殺人事件のドラマの如しマーキェロが棚より  
落ちて割れて血の海  
飾り棚より転がり落ちし茂吉記念館と生家の  
絵皿は壊れざりにき  
震源地は海底四十五料と言ふ水漬く屍の  
怒りかも知れぬ

秋一冬 帯広 中野 知弘

二次会は十年継ぐべし七月末 躊躇ひにけむ  
柳さん逝けり  
驛地下のカフェに夫人と俱なりき 会ひて別  
れしレトルヴァアーユは  
かにかくに辞さむとすれどこの嵐 立ちつく  
しるわが名義かな  
治療止む 心不・肺炎・梗塞に失語九三翁生  
き還りくる  
余震あり冒険映画を止むるとき机の下の度胸  
なりけり

天王寺の色 札幌 魚住あらた

けふをしもつくづくたりき秋の花  
シロヨメナの花オケラの花を  
けふをしも頭花のつた管弦に  
紫苑の花はつくづくたりき  
けふをしも仲秋のころはつくづくと  
おけらの花と山法師花  
けふをしも緑は白と重なりて  
つくづくたりき小田巻の花  
けふをしも竜胆の想ひ冬めくを  
つくづくたりき天王寺の色

